

〔特別講義要旨〕

『顎顔面補綴の基礎と臨床』

愛知学院大学歯学部第一歯科補綴学教室
助教授 田 中 貴 信

日時：1991年2月5日(火) 3：10～6：00

通常の歯科補綴学は歯や歯槽骨の欠損を対象とするものであるが、欠損や変形が顎骨に及んだり、舌、軟口蓋、頬部、顔面等の軟組織まで拡大した場合にも、様々な人工物（補綴物）を利用して、各種の審美・機能障害の改善が行われるが、この分野を顎顔面補綴学と称す。我が国ではまだ未熟な分野であるが、それでも現在700名を超える会員を擁する専門学会を持つまでになった。

顎顔面補綴処置の対象は、一般的に腫瘍、炎症、外傷、奇形に因る欠損や機能異常を持ち、外科処置等の一次治療後も各種の問題を残し、補綴物に因る処置を必要とする者である。実際の臨床では、悪性腫瘍と口蓋裂患者が主体と成る。このような患者に適用される補綴物は多種にわたり、未だ専門的にも未整理な部分があるが、代表的なものとして顎義歯とエピテーゼとがある。

顎義歯は口腔内に適用され通常の義歯に準じた形態と機能を有する補綴物であるが、この種

の患者の口腔の状態は補綴的に極めて不利なことから、それぞれの症例の条件に応じた柔軟な対応が必要である。先ず上顎においては、多くの場合、顎骨の欠損によって口腔と鼻腔が交通し、飲食物や空気の漏洩が大きな機能障害となる。よってこの場合の顎義歯にとって、この欠損部の閉塞が必須の要件となる。これに対して、下顎の欠損では、下顎骨の左右の連続性が失われ、残存部が患側に偏位し、それに補綴物で対応することが主要な問題点となる。即ち、顎義歯による咬合の回復・改善が先ず求められることになる。

エピテーゼは顔面補綴物とも呼ばれ、顔の表面の欠損や変形部を専用の軟性材料によって形態を回復し、審美性の改善を図るものである。鼻や耳介、それに眼窩、頬部などが対象となる。もちろん、staticなもので、顔の動きには追従出来ないが、様々な理由で生体組織による再建が不可能な症例では臨床的に極めて有用な手段である。

（担当：補綴Ⅰ講座）